忘れ ヒントがあれば思い出すことができ、自分でも自覚し、進行も遅く、判断力が低下することはない。

一方、認知症になると体験したことを丸ごと忘れるので、ヒントがあっても思い出すことができだんだん進行し、判断力も低下してくる。

認知症にはいくつかのタイプがあるが、アルツハイマー型、レビー小体型、血管性が3大認知症と呼ばれ、全体の85％を占める。中でアルツハを占め、認知症＝アルツハイマー病との一般的な認識となっている。女性の方がなりやすく、老人斑や神経原線変化が海馬を中心に脳の広範囲にでき、脳の神経細胞が死滅して行く。記憶障害かわからないなども特徴。

アルツハイマーの第1期は健忘期と呼ばれ健忘症状、見当識障害、徘徊などの症状が出、第2期の混乱期は高度の知的障害、失語、失行、失認、幻覚、妄想などが現れ、第ビタミンB、C、Eの摂取も効果が期待される。米国のある研究によると、高カロリー食をを食べる地域の住人の方が、質素な食事をとる地域の住人より発症の可能性が高いともいわれている。

「白梅会」がハワイの介護施設訪問
ミュージック・セラピーも視察

高齢化が進む近年、認知症は世界各国で治療と共に介護の観点からも大きな社会問題となっている。

静岡県浜松市を中心に病院や介護施設を多角的に経営している医療法人財団「白梅会」は海外研修制度を設けて、世界レベルで介護研究に努めており、この度、専門職員がハワイの介護施設マノア・コテッジ・カイムキを訪れた。責任者のカルビン・ハラ氏の案内で所内を見学、担当者らから認知症入居者の介護の実態の説明を受けた。松野紀代子さんは日本と比較して「規則なども緩やかで、全てにおおらか」とハワイの印象を語った。

日本ではドイツなどを参考にした介護保険制度を2000年からスタートし、大小さまざまな規模の認知症対応の共同生活介護施設も数多く出来ている。言語等コミュニケーション能力のある軽度、中度の患者（要介護者）を受け入れ、本人の残存能力を引き出しながら、低下防止に努めてきた。

10数年が経過し、認知症の進行と共に心身能力の低下は避けられず、医療ニーズや看取りニーズまでも求められるようになった。最近は地域密着型サービスへの傾向を強め、短期利用や通所介護などの柔軟な対応が求められ、サービスも多様化している。

ハワイも日本も施設とともに老人医療の医師や介護士の絶対数が不足しているといわれている。

発達障害や、脳機能障害その他精神的にトラブルに効果があると言われるミュージック・セラピーは認知症にも実績を上げており、入居者の一人にミュージック・セラピスト（音楽療法士）の梶原恵子と山浦和美さんが実践する治療も紹介された。このような専門職の増加が期待されている。

マノア・コテッジ・カイムキ中庭で記念写真に納まる白梅会その他の皆さん＝ハワイ報知

* * *

『美』感じる脳の部位発見
医療分野への活用も期待

【共同】人が絵画や音楽を「美しい」と感じたとき、脳の一部分の血流量が増加する―。英ロンドン大神経生物学研究所の石津智大研究員（34）＝神経美学＝のチームが米専門誌などに発表した研究結果が注目されている。この部位はうつ病や認知症などの疾患で活動が落ちるとされ、石津研究員は「『美』によって活性化させる手法は、医療の分野などで生かせるのではないか」と期待する。

石津研究員のチームは「美しさ」に反応する脳の動きを探るため、人種や宗教などが異なる22～34歳の健康な男女21人を対象に、機能的磁気共鳴画像装置（f MRI）を使った実験を実施。肖像画や風景画などを16秒ずつ順に45枚提示し、美しいと感じたかどうかを示してもらった。

その結果、美しいと感じた場合、美しくないと感じた時と比べ、前頭葉の一部にある「内側眼窩前頭皮質」と呼ばれる領域で血流量が増加し、働きが平均で約35％活発化する共通性があることを確認。美しいと強く感じるほど、活動量も増えることが分かった。

この21人に音楽を聞かせた場合でも同様のデータが得られたという。ほかにも多くの実験を重ねた石津研究員は「科学の世界では、美に関する感情は客観的に測定できないと考えられてきた」として研究の意義を強調する。

医療関係者の間では、この脳の領域については、機能が低下すると、うつ病を含む精神疾患の一つである「気分障害」などを招く可能性があるとされてきた。

石津研究員は「欧米では、前頭葉に電流刺激を与えて活動を促す治療法が既に採用されている」と指摘。こうした状況を踏まえ、チームの研究成果も有効な治療法になり得るとし、「病院や高齢者施設が美術作品を多く取り入れるなどの方策が検討されるようになれば」と話す。

入居者に音楽療法を施す（左から）梶原（一人おいて）松野、山浦の皆さん＝ハワイ報知

認知症患者に歌と踊りを
元フラガールの小野さん

【共同】炭鉱閉山の危機を観光への転換で乗り越える様子を描いた映画「フラガール」のダンサーのモデルで、7年前から認知症を患っている小野恵美子さん（70）＝福島県いわき市＝が、同市で24日に開かれる認知症予防の啓発イベントに出演する。歌と踊りを取り入れた音楽療法などが紹介される。

小野さんは映画で女優の蒼井優さんが演じた役のモデル。イベントでは小野さんの活躍を振り返り、教え子の元フラガールが高齢者向けの踊り「健康フラ」を紹介。運動や音楽、ダンスが患者に与える効果、予防について医師が解説する。「認知症に苦しむ患者や家族の役に立てるのでは」と、小野さんの主治医らが企画した。

小野さんは自宅で夫の英人さん（73）の介護を受けながら暮らしているが、要介護度の区分は最も重い「要介護5」。

8歳からバレエを習い始め、21歳の時に同市の観光施設、常磐ハワイアンセンター（現スパリゾートハワイアンズ）のフラダンスチームの第1期メンバーに加わり、初代リーダーに就任した。10年間、トップダンサーとして活躍した後、後輩のフラガールを育成する傍ら、自身のダンス教室も開いた。

英人さんによると小野さんは発病後、物忘れが進んだが、フラダンスの曲を流すと踊り出すなど穏やかに生活しているという。「妻が人前に出るのは最後の機会。孤立しがちな家族だけでなく、社会全体で患者を支えるきっかけになれば」と話している。

Arcadiaは多方面にわたって
シニアケアの模範となっていま

The Arcadia Family of Comp
シニアリビングの規範を
Retirement Residence や 1
多くのサービスは、みな様の
ホームヘルス・サービスは、